

令和8年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第4号
(7月の発生予想)

令和8年6月30日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稻】

葉いもち	量：並 程度：少発生 (被害度1~20) 時期：並~やや遅い	<ul style="list-style-type: none"> ① 本田での初確認は6月25日で平年比3日早い(平年6月28日)。(±~+) ② BLASTAMによるいもち病感染好適条件は、全県的な出現は少ないが、6月下旬には各地域に出現している。(±~+) ③ コシヒカリBLの作付けが多く、発病進展には抑制的に働く。(ー) ④ 向こう1か月の天候は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されている。(±)
紋枯病	量：並 程度：少発生 (被害度1~20) 時期：並	<ul style="list-style-type: none"> ① 前年の発生量は平年並で、越冬菌核量は平年並と推測される。(±) ② 6月26日現在、本田での発生は未確認(平年7月4日)で、発生量は平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±~+)
稲こうじ病	感染量：少ない	<ul style="list-style-type: none"> ① 前年の発生量は平年比やや少なく、伝染源量は平年比やや少ないと推測される。(ー) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の留意事項】 多発生地及び前年に規格外が発生したほ場では、薬剤防除を実施する。</p>		
斑点米カメムシ類	量：並~やや多い 時期：並	<ul style="list-style-type: none"> ① 6月後半の畦畔すくい取り調査では、アカスジカスミカメの確認虫数は平年比やや多い、確認地点率は平年並。アカヒゲホソミドリカスミカメの確認虫数は平年並、確認地点率は平年比やや高い。オオトゲシラホシカメムシの確認虫数、確認地点率ともに平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の留意事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 水田周辺の畦畔や水田内の雑草管理を徹底し、斑点米カメムシ類の密度低減、水田内への侵入量低減に努める。 ② 今後の水稻の出穂期予報に留意し、品種ごとの適期防除に努める。 		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稲】 つづき

セジロウンカ	量：並 程度：少発生 (最高寄生虫数 1~25) 時期：やや早い	① 初確認は6月22日で平年比3日早い。(±~+) ② 6月後半の本田すくい取り虫数は平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(+)
ツマグロヨコバイ	量：並 程度：少発生 (最高寄生虫数 1~10)	① 6月後半の株当たり最高寄生虫数は平年並。(±) ② 6月後半の本田すくい取り虫数は平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(+)
コブノメイガ	量：並	① 6月26日現在未確認で発生量は平年並。(±)
コバネイナゴ	量：並 程度：少発生 (寄生虫数 1~10)	① 6月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(+)

【大豆】

アブラムシ類 (褐斑粒)	量：やや少 程度：少発生 (25株当たり寄生虫数 1~30)	① 6月後半のアブラムシ類の発生は未確認で、発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
-----------------	---	--

【なし】

黒斑病	量：やや少ない~並 程度：少発生 (発病葉率 1~5%)	① 6月後半の発病葉及び発病果は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予想されている。(±)
黒星病	量：並 程度：少発生 (発病葉率 1~5%)	① 6月後半に発病葉及び発病果が確認され、発生量(発病果)は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 発病した葉や果実は見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し、適切に処分する。</p> <p>② 防除効果を高めるため、薬剤散布は発病部位をせん除した後に行う。</p> <p>③ 耐性菌の増加を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。</p>		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【なし】つづき

セイヨウナシ 褐色斑点病	量：多い 程度：中発生 (発病葉率6～15%)	① 前年の発生量(葉)は平年比多く、菌量は平年比多いと推測される。(+) ② 6月後半の発生量(発病葉)は、平年比多く、中発生ほ場が確認された。(+) ③ 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
【防除上の留意事項】		
6月30日発表の注意報第1号(セイヨウナシ褐色斑点病の多発生に注意)を参照する。		
ナシヒメシンクイ	量：やや多い 程度：少発生 (被害果率1～2%)	① 6月後半の被害果の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② フェロモントラップにおける越冬世代成虫の誘殺数は平年比多～平年並、第1世代成虫の誘殺数は平年比やや多～平年並程度で推移。(+) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(+)
【防除上の留意事項】		
① 被害果は見つけ次第せん除して、園地外に持ち出し、適切に処分する。		
② 第3世代幼虫の防除時期は、7月後半～8月上旬で第2世代成虫誘殺盛期の直後である。		
ハマキムシ類	量：やや多い 程度：少発生 (被害葉率1～15%) 時期：並	① 6月後半の被害葉及び被害果は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 主要種であるリンゴコカクモンハマキでは、フェロモントラップによる越冬世代成虫の誘殺ピークは、概ね平年並(±)。誘殺数は平年比多～並(+)。 ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(+)
【防除上の留意事項】		
第2世代幼虫の防除時期は、7月中旬～8月上旬で第1世代成虫誘殺盛期の14日後である。		
アブラムシ類	量：並 程度：少発生 (寄生葉率1～5%)	① 6月後半の発生量(寄生葉)は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並と予想されている。(±)

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【なし】つづき

<p>ハダニ類</p>	<p>量：並～やや多い 程度：少発生 (寄生葉率1～15%)</p>	<p>① 6月後半の寄生葉は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① ハダニ類は、発生が多くなると防除が困難となるため、園内をよく観察し発生初期に防除を行う。 ② ハダニ類は薬剤抵抗性がつきやすいので、同一殺ダニ剤の使用は原則として年1回とする。</p>		
<p>コナカイガラムシ類</p>	<p>量：並～やや多い 時期：並</p>	<p>① 6月後半の被害果は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)</p>
<p>【防除上の留意事項】 樹皮の隙間、窪み、枝の切り口等をよく観察し、卵のうや虫の寄生が認められた場合は、ブラシ等でこすり落とす。</p>		
<p>果樹カメムシ類</p>	<p>量：並～やや多い</p>	<p>① 6月後半の被害果は未確認で、発生量は平年並。(±) ② トラップの誘殺数は概ね平年並。一部のトラップではチャバネアオカメムシ・クサギカメムシの誘殺が平年比やや多い。(±～＋) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)</p>
<p>【防除上の留意事項】 ① 発生には地域差や園地差があるため、園内をこまめに観察し、成虫や被害果を確認したら速やかに防除を行う。山林や雑木に隣接する園地や過去に被害を受けた園地では特に注意する。 ② 薬剤散布をする場合は、本県農作物病害虫雑草防除指針や地域の防除暦などを参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を遵守する。 ③ 果樹カメムシ類は夜行性のため、早朝の防除が効果的である。 なお、ピレスロイド系剤は効果が高く残効も期待できるが、天敵類に対する影響が強く、ハダニ類やカイガラムシ類の多発生を招くおそれがあるため、使用にあたっては他の害虫の発生状況も十分に考慮する。</p>		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【もも】

せん孔細菌病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1~10%)	① 6月後半の発生量(発病葉)は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 収穫期が近づき薬剤防除が困難となることから、以下の耕種的防除を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本病は風雨により発病が助長されるため、防風網の設置、補修等、防風対策を行う。 ・伝染源となる発病葉・枝・果実はせん除し、園地外に持ち出し、適切に処分する。 <p>② 次作における伝染源量を減らすため収穫後の秋期防除を必ず実施する。</p>		
灰星病	量：やや少ない~並 程度：少発生 (発病果率1~5%)	① 6月前半までの発病果は未確認で、発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 発病果は見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し、適切に処分する。</p> <p>② 重点防除時期は収穫20日前頃~収穫期である。</p>		
モモハモグリガ	量：並 程度：少発生 (被害葉率1~15%)	① 6月後半の被害葉は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
ナシヒメシンクイ	量：やや多い 程度：少発生 (被害果率1~2%)	① 6月後半の発生量(被害新梢)は平年比やや多い。(＋) ② フェロモントラップにおける越冬世代成虫の誘殺数は平年比多~平年並、第1世代成虫の誘殺数は平年比やや多~平年並程度で推移(＋)。 ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 被害新梢(心折れ)や被害果は見つけ次第せん除して、園地外に持ち出し、適切に処分する。</p> <p>② 第3世代幼虫の防除時期は、「なし」の項を参照する。防除を行う場合は、農薬使用基準(収穫前日数等)に注意する。</p>		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【もも】 つづき

果樹カメムシ類	量：並～やや多い	① 6月後半の被害果は未確認で、発生量は平年並。(±) ② トラップの誘殺数は概ね平年並。一部のトラップではチャバネアオカメムシ・クサギカメムシの誘殺が平年比やや多い。(±～+) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(+)
【防除上の留意事項】 ① 袋がけを行っていても果実が肥大して袋に密着すると袋の上から吸汁されるため、園内の発生状況をよく観察する。除袋後や無袋栽培では特に注意する。 ② 防除を行う場合は、農薬使用基準（収穫前日数等）に注意する。		

【ぶどう】

晩腐病	量：並	① 6月後半の発病果房は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
【防除上の留意事項】 ① 重点防除時期は、6月中旬～7月中旬である。 ② 着果量を適正にし、房作り終了後直ちに袋かけ、笠かけを行う。 ③ 着色期以降、発病果粒は伝染源になるため、見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し、適切に処分する。		
べと病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1～10%)	① 6月後半の発病葉は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
【防除上の留意事項】 ① 発病後の防除では効果が低いので、予防散布を徹底する。 ② 発病した葉や果実は見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し、適切に処分する。 ③ 散布時期に降雨が予想される場合は、散布が遅れないよう注意する。		
褐斑病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1～10%)	① 6月後半の発病葉は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【ぶどう】つづき

黒とう病	量：並 程度：少発生 (発病果房率1~10%)	① 6月後半の発病葉及び発病果房は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 発病した葉や新梢、果実は見つけ次第せん除し、園地外に持ち出し、適切に処分する。</p> <p>② 散布予定日に降雨が予想される場合は、散布を延期せず降雨前に散布する。</p> <p>③ シャインマスカットなど本病に弱い品種は、特に観察を怠らず早期防除に努める。</p>		
フタテンヒメヨコバイ	量：並 程度：少発生 (被害葉率1~25%)	① 6月後半の被害葉は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)

【かき】

円星落葉病	量：やや少ない	① 前年の発生量は平年比やや少なく、越冬伝染源量もやや少ないと推測される。(－) ② 向こう1か月の気温は高く(－)、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 子のう胞子飛散は、7月中旬頃までの降雨後に多く見られるので、7月上旬の予防散布を徹底する。</p> <p>② 樹勢の低下は発病を助長するので、肥培管理に努める。</p>		
すす点病	量：やや少ない	① 前年の発生量は平年比やや少なく、越冬伝染源量もやや少ないと推測される。(－) ② 向こう1か月の気温は高く(－)、降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
チャノキイロアザミウマ	量：並 程度：少発生 (被害果率1~2%)	① 6月後半の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
カキクダアザミウマ	量：並 程度：少発生 (被害果率1~2%)	① 6月後半の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
果樹カメムシ類	量：並~やや多い	① トラップの誘殺数は概ね平年並。一部のトラップではチャバネアオカメムシ・クサギカメムシの誘殺が平年比やや多い。(±~＋) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>「なし」の項を参照する。</p>		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【すいか】

つる枯病	量：並 程度：少発生	① 6月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
炭疽病	量：並 程度：少発生	① 6月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
アブラムシ類	量：並 程度：少発生	① 6月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
ハダニ類	量：並 程度：少発生	① 6月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)
オオタバコガ	量：並 程度：少発生	① 6月後半の発生量は平年比やや少ない～並。(－～±) ② フェロモントラップの誘殺数は平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は高いと予想されている。(＋)

【秋冬ねぎ】

べと病	量：並 程度：少発生（発病株率1～10%）	① 6月後半の発生は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(－)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
さび病	量：並 程度：少発生 (発病度1～5)	① 6月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(－)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
黒斑病・葉枯病	量：並 程度：少発生 (発病度1～20)	① 6月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
軟腐病	量：やや多い 程度：少発生 (発病株率1～5%)	① 6月後半の発生は未確認で、発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(＋)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
ネギハモグリバエ	量：やや多い 程度：中発生 (被害度11～20)	① 6月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(＋)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【秋冬ねぎ】 つづき

ネギアザミウマ	量：やや多い 程度：中発生 (被害度 11~20)	① 6月後半の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>・ 定期的に防除を行い、密度抑制に努める。その際、作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる薬剤をローテーションで使用する。</p>		
シロイチモジヨトウ	量：多い 程度：少発生 (被害株率 1~10%)	① 6月後半の被害は平年比多い。(+) ② フェロモントラップの誘殺数は平年比多い。(+) ③ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。

【ユリ(球根養成)】

葉枯病	量：並	① 6月後半の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
アブラムシ類	量：並	① 6月後半の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)

【その他】

【アブラナ科野菜】 コナガ	量：並	① フェロモントラップの誘殺数は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は高く(-)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
------------------	-----	--

～ 防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病害虫雑草防除指針」を参照してください ～

注1：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多
いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の5段階で表記しています。

②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発
生、中発生、多発生、甚発生いずれに該当するかを表記しています。

注2：「予報の根拠」の、（+）は発生量を増加させる要因、（-）は発生量を減少させる要因、
（±）はどちらともいえない要因を示しています。

～ 農薬は適正に使用しましょう ～

【新潟県農薬危被害防止運動実施期間：6月1日～8月31日】

- 農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。
- 使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使
きましょう。
- 農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺の
生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。
- 農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。
- 水田で湛水して農薬を散布する場合は、処理後7日間の止水を厳守し、落水しないようにしま
しょう。

【参考】北陸地方 1か月予報（6月27日から7月26日までの天候見通し）
（新潟地方气象台：令和8年6月25日発表）

＜予想される向こう1か月の天候＞

- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。
- ・平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。
週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。
2週目は、高い確率50%です。
3～4週目は、高い確率60%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10	40	50
降 水 量	40	30	30
日照時間	30	40	30

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

	低い	平年並	高い
1週目（6月27日～7月3日）	20	50	30
2週目（7月4日～7月10日）	10	40	50
3～4週目（7月11日～7月24日）	10	30	60